

2-1 明朝体のデザイン

常用漢字表では、個々の漢字の字体を、便宜上、明朝体のうちの一種を例に用いて示している。これは、現在、明朝体が印刷文字として最も広く用いられていることによる。

一般に使用されている各種の明朝体には、同じ字でありながら、微細なところで形状の相違の見られるものがある。しかし、それらの相違は、いずれも書体設計上の表現の差、すなわちデザインの違いに属する事柄であって、字体の違いではないと考えられる。つまり、それらの相違は、字体の上からは全く問題にする必要のないものである。

このような個々の明朝体にデザインの違いがあることは、必ずしも一般に広く理解されていない。そうしたデザインの違いをもって別の漢字であるとみなしたり、手書きの楷書においてもその差を再現しなくてはならないと考えたりするといった誤解が生じている。ここでは、常用漢字表が明朝体のデザインの違いとして挙げる例を改めて引用し、必要に応じて説明を加える。

なお、ここに挙げているデザイン差は、現実異なる字形がそれぞれ使われてきており、かつ、その実態に配慮すると、字形の異なりを字体の違いと考えなくてもよいと判断したものである。すなわち、実態として存在してきた異字形を、デザインの差と字体の差に分けて整理することがその趣旨であり、明朝体をはじめとする印刷文字の字形を新たに作り出す場合に適用し得るデザイン差の範囲を示したのではない。

また、ここに挙げている明朝体のデザイン差は、おおむね「筆写の楷書字形において見ることができる字形の異なり」と捉えることも可能である。そのことを「2-2 手書き文字のいろいろな書き方に明朝体のデザイン差と共通するところがあるもの」で具体的に説明した。

(1) へんにつくり等の組合せ方

漢字のへんにつくり等の組合せに、以下に挙げるような相違がある場合にも、字体の違いと考えなくてもよい。

① 大小、高低などに関する例

↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
硬 硬 吸 吸 頃 頃

② はなれているか、接触しているかに関する例

↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
睡 睡 異 ← 異 ← 挨 挨

(2) 点画の組合せ方

漢字の点画の組合せに、以下に挙げるような相違がある場合にも、字体の違いと考えなくてもよい。

① 長短に関する例

→雪→雪→雪 満←満← 無←無← 斎←斎←

② つけるか、はなすかに関する例

↓ 発 発 備←備← 奔 奔 溺←溺←
↓ 空 空 湿←湿← 吹 吹 冥←冥←

③ 接触の位置に関する例

→岸→岸 家←家← 脈 脈 脈
蚕 蚕 印 印 →蓋→蓋

④ 交わるか、交わらないかに関する例

→聴→聴 非 非 祭←祭←
↑ ↑
→存→存 →孝→孝 射 射
↑ ↑

⑤ その他

→芽→芽→芽 夢 夢 夢

(3) 点画の性質

点画の表し方について、以下に挙げるような相違がある場合にも、字体の違いと
考えなくてもよい。

① 点か、画(棒)かに関する例

→帰→帰 ↓ 班 班 均 均 麗 麗 蔑 蔑

- ② 傾斜，方向に関する例

考考 値値 望望

- ③ 曲げ方，折り方に関する例

勢勢 競競 頑頑頑 災災

- ④ 「筆押さえ」等の有無に関する例

芝芝 更更 伎伎
八八八 公公公 雲雲

- ⑤ とめるか，はらうかに関する例

環環 泰泰 談談
医医 継継 園園

- ⑥ とめるか，ぬくかに関する例

耳耳 邦邦 街街 餌餌


上記の「とめるか，ぬくかに関する例」は，斜めの画に関するものである。一般に，明朝体のデザインでは，縦画の終筆はぬくように表さず，とめた形にされる。

- ⑦ はねるか，とめるかに関する例

四四 配配 換換 湾湾

- ⑧ その他

→次→次* →姿→姿

※ 「次」の左の部分は，元々「にすい(「彳」)」ではなく，「二」を成り立ちに持つなどとされる形である。明朝体でも「」の形であった。

(4) 特定の字種に適用されるデザイン差

「特定の字種に適用されるデザイン差」とは、以下の①～⑤それぞれの字種にのみ適用される印刷文字のデザイン差のことである。これらはいずれも、平成22年の常用漢字表の改定において追加され、現実に異なる字形がそれぞれ使用されており、かつ、その実態に配慮すると、字形の異なりを字体の違いと考えなくてもよいと判断できるものに含まれる。ただし、下記①～⑤については、その字形の異なりを他の字種、特に、昭和56年の常用漢字表に既に採用されていた字種の印刷文字には及ぼせないと判断し、このような扱いとしたものである。

① 牙・牙・牙

明朝体の「牙」については、このようなデザインのバリエーションがあり得るが、同様の又は似た構成要素を有する「芽」、「雅」、「邪」など、他の常用漢字については、左の字形の部分(「𠂇」)は用いない。

② 韓・韓・韓

明朝体の「韓」については、このようなデザインのバリエーションがあり得るが、同様の又は似た構成要素を有する「偉」、「緯」、「違」など、他の常用漢字の明朝体には、中央の字形の部分(「𠂇」)は用いない。

③ 茨・茨・茨

明朝体の「茨」については、このようなデザインのバリエーションがあり得るが、同様の又は似た構成要素を有する他の常用漢字のうち、「恣」については、左の字形の部分(「𠂇」)を用いる。「恣」以外の「凝」、「姿」、「諮」、「次」、「准」、「凍」、「冷」、「冶」、「凄」などの明朝体には、左の字形の部分(「𠂇」)は用いない。

④ 叱・叱

明朝体の「叱」と「叱」は本来別字とされるが、その使用実態から見て、異体の関係にある同字と認めることができる。「叱」については、上に示すようなデザインのバリエーションがあり得るが、同様の又は似た構成要素を有する「七」、「虞」、「虜」、「虚」、「虐」、「虎」、「膚」、「窃」、「戯」、「慮」、「劇」、「切」など、他の常用漢字の明朝体には、右の字形の部分(「𠂇」)は用いない。

⑤ 𠂇・𠂇

明朝体の「𠂇」については、このようなデザインのバリエーションがあり得るが、似た構成要素を有する「𠂇」の明朝体には、左の字形の部分(「𠂇」)は用いない。

2-2 手書き文字のいろいろな書き方に明朝体のデザイン差と共通するところがあるもの

「2-1 明朝体のデザイン」で見たデザイン差の分類については、おおむね「筆写の楷書字形において見ることができる字形の異なり」の分類として見ることも可能である。「2-1 明朝体のデザイン」の分類に従って、手書きの楷書における字形のバリエーションの例を以下に示した。ただし、「(4) 特定の字種に適用されるデザイン差」は、印刷文字に限った問題であるため、ここでは取り上げていない。

ここには、ごく一部の例を示したに過ぎず、例示された漢字における字形の異なりは、ここで取り上げていないその他の漢字においても、広く見られるものである。

なお、ここに挙げた例のうちには、「4 手書き(筆写)の楷書では、いろいろな書き方があるもの」にも掲げているものがある。また、具体的な書き方の例については、手書きする際の慣用として、より一般的であると考えられるものがある場合には、それを先に示したため、「2-1 明朝体のデザイン」と同じ順序にはなっていない。

(1) へんとつくり等の組合せ方

① 大小, 高低などに関する例

硬 硬 吸 吸 頃 頃

② はなれているか, 接触しているかに関する例

睡 睡 異 異 挨 挨

(2) 点画の組合せ方

① 長短に関する例

雪 雪 雪 満 満 無 無 斎 斎

② つけるか, はなすかに関する例

発 発 備 備 奔 奔 溺 溺^{*}
空 空 湿 湿 吹 吹 冥 冥

※ 「溺」は、手書きの楷書では「溺」のように書かれることが多い。

③ 接触の位置に関する例

岸 岸 家^{*} 脈 脈 脈
蚕 蚕 印 印 蓋 蓋

※ 明朝体の「家」の字形は、手書きの楷書では用いないのが一般的である。したがって手書きの例は示していない。

④ 交わるか、交わらないかに関する例

聽 聽 非 非 祭 祭
存 存 孝 孝 射 射

⑤ その他

芽 芽 芽 夢 夢 夢

(3) 点画の性質

① 点か、画(棒)かに関する例

帰 帰 帰 班 班 班
均 均 麗 麗 蔑 蔑

② 傾斜, 方向に関する例

考 考 値 値 望 望

③ 曲げ方, 折り方に関する例^{*}

勢 勢 競 頑 頑 災

※ 手書きの楷書では、明朝体の「競」、「頑」、「災」に見られるような、2画に見える折り方と同様の表現をしないのが一般的である。したがって、そのような表し方をする手書きの例は示していない。

④ 「筆押さえ」等の有無に関する例

手書きの楷書では、明朝体のような筆押さえの表現をしないのが一般的である。したがって、手書きの例は示していない。

⑤ とめるか、はらうかに関する例

環環 泰泰 談談
 医医 継継 園園

⑥ とめるか、ぬくかに関する例

耳耳 邦邦 街街 餌餌^{※1}

⑦ はねるか、とめるかに関する例

四四 配配 換換 湾湾

⑧ その他^{※2}

→次 →姿

※1 「餌」は、手書きの楷書では「餌」のように書かれることが多い。

※2 「次」や「姿」などの「にすい」型の2画目部分は、明朝体のように下方へ点を打ってはねるような書き方(「∨」)ではなく、上の例のような書き方が一般的である。このことは、「にすい」の2画目部分、「さんずい」の3画目部分でも同様である。